

## 編集後記

ますます変化のスピードが速くなっていく社会のなかで、人の価値観、「生きがい」も変化していくことが考えられます。そんな時代に求められるのは、不変の事実を見極めつつも、社会や個人の変化に目を向けながら、「生きがい」を再定義していこうとする姿勢であるといえます。これは学術誌では難しく、「生きがい研究」のような媒体だからこそできることといえるのではないのでしょうか。執筆にあたっては、無理難題であることを理解しつつも、編集委員会で議論された論点をお伝えし、課題提起や提言も書いてくださいとお願ひしています。

「生きがい研究」32号では、現代社会の大きな課題となっている「個人化」をメインのキーワードとしました。「個人化」には、個々の生き方に自由度が増す一方で、個々にさまざまな生活リスクへの対処が求められるという、良い面と負の側面があることがしられています。昭和に比べて隣近所で支え合わなくても生きていける時代、自宅から、距離や時間を選ばずに人や社会とつながれる時代、そんな変化のなかで人や地域のつながりがどう変わりつつあるのか？ 生きがいにどんな影響を及ぼしているのか？ 本号では、4名の異なる専門分野の研究者に、『個人化する社会と、人・地域のつながり』をテーマに論じていただきました。

これまで親密さを前提にコミュニティやつながりのあり方が検討されてきたなかで、そこに距離をおく人、そこに拒否感をもつ人が増えつつあることがさまざまなデータで明らかにされています。石黒格氏の研究報告のキーワードとなっている「親密ではない他者」は、新たな視点を提示するものといえます。インターネットが高齢層にも急速に普及していくなかで、対面を前提としないコミュニケーションが定着しつつあるといえます。

ソーシャルメディアの普及に着目した菅原育子氏の研究報告は、これからの高齢者のつながりや活動のあり方を考えるうえで重要な視点を提示するものといえます。

活動に後ろ向きな人にも目を向けた池田普平氏の研究報告では、「地域の関係性の希薄化が自身や周囲の暮らしにもたらすさまざまな影響について、人々がその意味を理解したうえで、かかわり方を主体的に選び取っていく姿勢が求められる」と指摘しています。これは、個々人が、それぞれの生きがいのあり様を自身で考え選び取っていくこと、社会としてこれを支えていく必要性を提示しているといえます。

活動継続と社会への学びの関連を示した三浦知陽氏の研究報告は、この支えを考えるヒントを提示しているといえるのではないのでしょうか。

特別寄稿、研究発表、事業報告から、本号に込められたメッセージ「個人化を前提にどのような社会をつくっていくのか？」を読み解き、共に考え、ヒントをみつけていただけたら幸せです。

(澤岡 詩野)

## 「生きがい研究」編集委員名簿

委員長 **坂野 達郎** 東京科学大学名誉教授

委員 **熊野 道子** 元大阪大谷大学教授  
神戸学院大学心理学部研究員  
放送大学非常勤講師

**澤岡 詩野** 東海大学健康学部健康マネジメント学科准教授

(敬称略・五十音順)

## 生きがい研究 (第32号)

令和8年3月31日 発行

編集・発行 ——— 一般財団法人 長寿社会開発センター

〒105-8446 東京都港区西新橋3-3-1 KDX西新橋ビル6F  
☎03-5470-6753

製作 ——— 中央法規出版株式会社

※無断転載・複製を禁じます。